

神の「主権論争」に関する考察

ものみの塔聖書冊子協会発行の書籍「神を崇拝する」p. 50～

第6章「わたしたちすべてが直面しなければならない論争」に基づく「主権論争」に関する考察

「サタンは、エホバはうそをついていると真っ向から非難し・・・」 挿 50p, 1
たなどとは聖書に書かれていません。

蛇は最も狡猾なもので、ましてや「真っ向から非難」などしていません。

むしろ、こっそりと疑念を抱かせる仕方です。

「エバの命もアダムの命も神への従順に依存しているわけではない・・・」 挿 50p, 1
などとは一言も言っていません。 ただ実を食べても死なないと言っただけです。

「サタンは、神が被造物に良いものを与えないでいる、つまり生活における独自の規準を定める能力を押しつけている、と主張し、・・・」 挿 50p, 1

てなどいません

「サタンは事実上、人間は神の律法に従うより独自に決定するほうがうまくゆく、・・・」
挿 50p, 2

などとは言ってはいません。

「こうしてサタンは、神の支配の仕方に異議を唱えました。」 挿 50p, 2

聖書中のどこにもそうした論議は見当たりません

「・・・と言ったも同然と私たちは考える。」 というのならまだしも、「と主張した」「唱えた」と断言するのは乱暴でしょう。

「これによって、神の宇宙主権、すなわち支配を行なう神の権利をめぐる極めて重要な論争が引き起こされました。」 挿 50p, 2

「これ」によって。とはどれによって？

「神の支配の仕方に異議を唱え」 たという勝手な推論の展開に基づいて、こう結論される。ということのようですが、しかし実際にはことさらに何も論争などは引き起こされてはいません。

事実、神も、イエスも、預言者も聖書筆記者たちも、誰一人こうした「宇宙主権の論争」に言及した人はいません。

「人間にとって、エホバの支配の仕方とエホバから独立した支配とでは、どちらが良いのか、という」 拝 50p, 2

問題が提起されたことは一度もありません

創世記 3 章のほんの数行だけに基づいてこれほどの深読みができるのはすごいことです。というより、創作もしくは捏造と表現したほうが実情にあっています。聖書そのものに、明確な形で、あるいはそれをほのめかす程の論議も存在しないということは、これらはすべて、ただの思いこみ、思い過ごしに他ならないと言って良いでしょう。

さて、もう少し、掘り下げてみましょう。

ものみの塔の主張する「宇宙論争論」は「独自に決定するほうがうまくゆく」、「エホバから独立した支配」という表現に見られるように、端的に言えば、「独自 / 独立」という問題です。

言い換えれば、サタンがこれを提言し、実際に試すべきだというような主張に対して、神はその提言 / 提案を受け入れ、「支配に関する倫理性」が未解決であったことを認め、同意した故に、それ以降の歴史がこうなっているということになります。

聖書中のどの部分が、この論議を支持するのでしょうか？

さらに、もし「神から独立して、独自に自らの基準を定める方が、人間の益になる」ということを証明したいのであれば、サタンも、人間の事柄に一切、手出し、口出しをせず、ただ黙って人間の自治を見守るのでなければ、それは証明されません。

しかし、『全世界が邪悪な者の配下にあります』。一ヨハネ第一 5:19。(新世界訳) とあるように、サタンの行動からは、支配の正当性や倫理的な問題に意義を唱えるなどという高尚な動機などはサラサラないことが証明されます。

ただ単に、自分が支配したかった。その一言につきます。

ともかく、ものみの塔の「宇宙論争論」によれば、神は、決着がつくまで主権の表明、行使を保留にされたということになります。

しかし実際は、罪が犯された時、神はご自分の主権を行使され、三者に対して有罪判決を下し、いずれも存在については「執行猶予付き」でしたが、アダムとエバは直ちに刑罰を蒙り、1000 年未満で死刑執行がなされました。

命と体の創造者に対する故意の背きの当然の結果でした。

サタンに対しても「お前の頭は砕かれる」と、直ちに死刑判決を下されました。

この時点、つまり自分の存在の否定という裁きを下した神の主権の執行に対してさえ、サタンは一言も異議を唱えたり、論争などしていません。不服申立てをしたい気持ちはあつ

たでしょうが、何一つそうしたリアクションが無いということは、サタンも神の主権を認めていたという証拠でしょう。

神はご自分の主権を手放してもいなければ、幾分差し控えるということなどを行ってはられません。

神は常に、終始一貫「主権者」であり、主権を行使されています。

その主権の行使は、イスラエルの歴史の中にはっきりと現れています。

神の主権が今なお係争中であり、倫理的な問題が未解決であるなら、神ご自身、また、み子やみ使たちがそうした認識を持っているなら、人間の事柄に神が介入されることはないはずです。

ものみの塔の主張によれば、「エホバはアダムとエバを直ちに処刑することもできましたが、そうしたのでは主権をめぐる論争に納得のゆく決着をつけることはできなかったでしょう。神は、かなりの期間にわたって人間の社会が発展するのを許すことにより、ご自分とご自分の律法からの独立がいったい何をもたらすのかを証明することができました。」

と述べていますが、もしそうであるなら、その正当性に「納得のゆく決着をつけるためのかなりの期間」のうち、ただの1回でも、神が人間の事柄に介入されたなら、「ああやっぱり」という疑念が確立し、もはや2度と、神の支配の正当性は未来永劫に証明されないということになります。

このことから神の主権に対する論争などと言うものは存在しないということです。

ものみの塔の「神の宇宙主権論争論」は完全に間違いであると断言できます。

もし仮に、サタンが神の主権に対して「宇宙の支配者として適任ではない」と異議を唱え、論争を引き起こしたとして、その倫理的な問題を解決する方法ですが、長い時間をかけるかどうかよりも重要なのは、誰がどのように立証する責任があるかという問題です。

ちょっと専門的で難しいですが、次の WIKIPEDIA の説明をお読みください。

『証明責任（しょうめいせきにん）とは、裁判をするにあたって裁判所又は裁判官がある事実の有無につき確信を抱けない場合（真偽不明）に、その事実の有無を前提とする法律効果の発生ないし不発生が認められることにより被る、当事者一方の不利益のことをいう。挙証責任、立証責任ということもある。民事訴訟では「証明責任」の用語が、刑事訴訟では「挙証責任」の用語が、一般的に使われることが多い。「客観的証明責任」「客観的立証責任」「形式的挙証責任」などとも表現する。』

そして法的な措置は、「異議の申立時の立証責任は『請求者』＝被害者が負う」事が原則です。

(民事でも、刑事でも同じ)

宇宙主権論争においては、「請求者」はサタンです。(神の一方的な支配により不当な被害を受ける(た))という主張ですから、例え、その論争に誰が関係していると言い張ろうとも、その主張が正しいと言える根拠、事実証拠を提出して証明する責任を負っているのは、全歴史、全宇宙の中で唯一サタンだけにその責任があります。

勝手な言いがかりをつけてきて、その事実をお前が証明しろと迫る人がいたとしたら、完全に狂っています。

ですから、仮に論争が出されたとしても、「それにはあなたも関わっていますから、あなたには論争解決のため励むべきです」というのは甚だしい、お門違いであるだけでなく、それはサタンの責任を引き受けることであり、サタンの証人として立つことを意味します。

「ヨブ記に関連した、「人間の忠節論争論」についての考察

「サタンの異議申し立ては、アダムとエバの子孫ならびに神の霊の子たちすべて、それにエホバの深く愛する初子をさえ含むものでした。」 拝 51 p, 3

この文言は論外です。これに至っては、一体どんな根拠があつてこうした主張をしているのか気がしれません。

「サタンは、エホバに仕えている者は神とその支配の仕方を愛するからではなく、利己的な理由でそうしている、と主張し・・・」 拝 51 p, 3

たことなどありません

ものみの塔の空想ではなく実際に聖書に書かれている、サタンの主張は以下の言葉です。

「サタンは主に答えて言った。「ヨスはいたずらに神を恐れましょうか。」 - ヨブ 1:9

新世界訳では「いたずらに」と訳されていますが、このヘブライ語は「キンナーム」で「無料、役に立たない、無用」といった意味です。

1:9 はまさに「ただで」というニュアンスなのでしょう。

しかしこの言い回しは必ずしも「利己的な理由」とはいえません。原語にそうしたニュアンスは含まれていません。

神の寛大さ、善良さを知っている人にとって、神に期待し、祝福を望むのは当然のことだからです。

そうした、人間の普通の感覚を、サタンですら、「ただでそんなことする人はいない。」と

表現しているところを「利己的な理由」と断言できるひねくれた神経はどこから来るのか、その屈折した思考はサタン以上ではないかとさえ思えます。

「だれでもつらい目に遭わされれば、利己的な欲求に屈してしまう、とサタンは論じ・・・」
 拝 51 p, 3

たことも無論一度もありません。
 サタンはこう言いました。

「サタンは主に答えて言った。「皮の代わりには皮をもってします。人は自分のいのちの代わりには、すべての持ち物を与えるものです。しかし、今あなたの手を伸べ、彼の骨と肉とを打ってください。彼はきっと、あなたをのろうに違いありません。」—ヨブ 2:4,5

「皮のためには皮」という表現は分かりにくく、ネットで検索しても明確な説明をしているところはどこにも見つからないので、私なりの理解をここに記しておくことにします。

皮膚（体）のためには皮（動物の皮＝衣服）
 身体のためなら衣服を犠牲にする
 生命のためなら全財産を犠牲にできる
 そして、「苦痛」には「呪い」で返報するはず。

皮を通り越して、「肉と骨」に触れるなら、必ず神を呪う。つまり、潔白であることを止め、神を恐れることを無駄なこととして自分を全うなものものとして保つことを止めてしまう。言い換えれば、「肉と骨」に触れることはもちろん多大の苦痛を意味するが、むしろそれ以上の効果、つまり神の是認と祝福の確認が得られなければ、人は自分の義を手放すに違いない。ということでしょう。

ものみの塔は、このサタンの述べた「皮には皮、命には持ち物」というくだりを「だれでもつらい目に遭わされれば、利己的な欲求に屈してしまう」という意味であると解していますが、それは、例えば、強盗に「有り金を全部出せば命だけは助けてやる」と言われた時、財布ごと渡して自分の命が助かるようにした人を「利己的な欲求に屈して」しまった人と判断するようなもので、ものみの塔の神経は異常です。

最後にもう一つ重要な点である「忠節」という表現に注目したいと思います。

「その上なおも彼は自分の忠誠を堅く保っている」ヨブ 2:3（新世界訳）

新世界訳が「忠節」と約している語「へ語：トゥーマー」を他の翻訳はこう訳しています。

「彼はどこまでも無垢だ」新共同訳

「自分の誠実を堅く保っている」新改訳

「おのれを全うした」口語訳

「無垢、誠実、全う」と訳している理由は、この語の意味が「完全生 (integrity)」という意味の語だからです。

このヘブライ語は「終了、完了」を意味する「ヘ語：ターマム」から派生した語で、字義的には「完成された、完璧」というようなニュアンスを伝えます。

ですから、上の3つの中では口語訳が一番、原語の意味を反映しています。

どう捉えても「忠節や忠誠」というような特質を明確にするような意味あいの語ではありません。

どちらかと言うと 神に対するというより、もしどうしても忠節という言葉を使うなら自分自身に対する忠節、頑なに決して自分を曲げないで己を律する特質という方が正しいでしょう。

確かにヨブ記全体を見ると、ヨブの自分自身の、徹底的に罪を犯さない態度を貫いた人という姿が全面に現れていると言えます。

今日のすべてのクリスチャンにも忠節の試みがあることは確かです。

しかし、それはヨブの時代の出来事と直接の関係は何もありません。

また、仮にこれが、全人類の忠節の問題だと仮定しても、すでにこのヨブの件でこの問題は証明されており立派な判例となっているわけですから決着を見たと言えます。

もしそれでもまだ利己的な動機以外に神に忠節な人間が存在し得るかどうかがどうかは未だ疑問で未解決だというなら、100%すべての人間に同様の試験を課すほかはないでしょう。ものみの塔はどうしても、人間の忠節に対する疑念を持ち続けていたいようです。

長年にわたり、繰り返主張し続けているこの「人類の神への忠節論争論」

「あなたは、人間がかつて直面した論争の中で最も重要なものに巻き込まれています。」

有りもしない論争に巻き込もうとしているのは、神でもサタンでもなく、ものみの塔です。

新約聖書中で具体的な「論争」に言及している聖句はすべて「割礼」に関するものです。

また「ヨブ」に言及している箇所はヤコブ5:11のヨブの「忍耐」についての1箇所だけです。

明らかに「ヨブ記に関連した『人間の忠節論争論』はものみの塔の創作です。

ものみの塔は次の聖句の意味するところをわきまえるべきでしょう。

「しかし、愚かな議論、系図、口論、律法についての論争などを避けなさい。それらは無益で、むだなものです。」 - テトス 3:9